漁業集落における祭りの変容

―三重県度会郡南伊勢町奈屋浦を事例に―

清　水　万由子・清　水　莉　子

▶キーワード

祭り、漁業集落、人口減少、
漁業技術、生活様式

▼要　旨

人口減少に伴う地域社会の変化は、農山漁村の伝統的生活文化の一つである祭りにおいても、途絶や縮小などの変化をもたらしている。本研究は、古くから集落単位での沿岸漁業が盛んであった伊勢志摩地方の漁業集落を事例として取り上げ、祭りの変容実態とその背景を明らかにすることを目的とする。事例研究の対象とするのは、三重県度会郡南伊勢町奈屋浦の祭りの変容である。文献資料と聞き取り調査から、奈屋浦の恵比寿祭、天王祭、浅間祭の変容実態について明らかになったことを述べた。また、祭りの変容の要因として、若年層の域外流出による祭りの担い手不足、物質的な生活の豊さや労働形態の変化などが考えられた。

Ⅰ　はじめに

1　研究の背景

2010年から日本の人口は減少局面に入った。大都市への人口集中が加速する一方で、地方都市や農山漁村では人口減少と少子高齢化が加速し、地域自治や伝統文化の維持が困難な状況が生まれつつある。日本の多くの農山漁村には、人々が構築してきた伝統的な生活文化が蓄積されている。これらは人間が地域の自然を利用し生活を営む中で形成されてきたものであり、人々の生活様式や生業の変化に応じて、伝統的な生活文化もまた変容している。

柳田國男は『日本の祭』の中で、日本の祭りの変化について、その最も重要な一つの変わり目は、信仰を共にせずに審美的な立場から祭りを見物する群衆の発生であるとしている。つま

り、日本の伝統的共同体の祭り（マツリ）の多くは次第に「美々しく華やかで、楽しみの多いもの」[1]あるいは一定の規模があり「見物というものが集まってくる」[2]祭礼（サイレイ）へと変化していったのである。現代における祭礼の変容をめぐっては、石川県珠洲市のキリコ祭りの衰退要因を探った研究がある[3]。それによれば、1）道路や護岸などの社会基盤整備による祭事場所の変化、2）都市への人口流出による担ぎ手の減少、3）就労形態の変化による祭事参加者層の変化と祭事内容の変化、4）祭りへの関心の低下、5）祭事等の簡素化・簡略化などが1950年代後半から徐々に進行し、祭礼の衰退に影響を与えていることが明らかになったという。都市部の祭礼においても、高度経済成長期を境にして衰退が見られ、様々な方法で復興した事例も報告されている。都市祭礼の衰退原因は、戦後に豪商への経済的依存の脱却が図られ祭礼内容が変化（合理化）したこと、社会構造の変化による旧市街地の空洞化[4]、冠婚葬祭の簡素化や因習の打破などの新生活運動[5]などが指摘されている。都市祭礼復興の背景には、1980年代以降に祭礼の文化的価値の見直しが進んだこと、祭礼が観光資源となり運営に公的団体が関与するようになったこと[6]、周辺部の新住民の取り込みや祭礼内容の合理化による時代への適応[7][8]などが指摘されている。これらの都市祭礼の研究からは、祭礼の衰退と復活が地域社会の衰退と再興と重ね合わせて理解されていることがうかがえる。祭礼の担い手が地域内に存在するか、また一定の労力や資金を祭礼に投入できるかというように、祭礼に必要な資源を地域社会が調達できるかが、祭礼の持続性に大きく影響を与えるからであろう。地域住民の間に蓄積された社会関係資本のうち「橋渡し型」と「結束型」の両方が、祭礼の復興に異なる効果をもたらす可能性が示唆されている[9]。これらの先行研究から、祭りや祭礼は、地域社会の経済的、社会的、空間的な状況の変化を反映して変化してきたことがわかる。また、人々の共同的な精神的営為であるがゆえに、祭りへの関心・参加は地域社会への帰属意識と関係しているとも考えられる。坂本ほか（2018）は住民主体による住民のための都市祭礼に注目し、「担い手としての住民の目線で祭礼を検討することで、生活レベルでの社会構造の変化を捉えられる」[10]とする。ここで言う「社会構造」とは、坂本ほか（2018）では住民組織など社会関係のあり方によって描こうとしているが、より広く見るならば経済関係や政治的な権力関係のあり方も含むものである。上野（1984）は「祭りの変容を通じて、共同体の変容にも迫ることができる」[11]とし、祭りの変容から地縁共同体における選択的地縁の拡大を明らかにしている。

一方で、近年の漁業集落が置かれている状況を見ると、沿岸部の開発、漁業技術の飛躍的進歩、漁業資源の枯渇、魚介類の消費動向の変化など、日本の漁業環境が大きく変化する中で、漁業集落も大きな社会構造の変化を経験していると考えられる。漁業集落の住民の目線で祭りの変容を捉えることで、その背景にある漁業集落の構造的変化をも捉えることが可能になるであろう。

2　研究の目的

本研究は、古くから集落単位での沿岸漁業が盛んであった伊勢志摩地方の漁業集落を事例として取り上げ、祭りの変容実態を明らかにすることを第一の目的とする。事例研究の対象とするのは、三重県度会郡南伊勢町奈屋浦（以下、奈屋浦）の祭りの変容である。奈屋浦は多くの漁村が点在する周辺地域の中では比較的新興の漁村であったが、現在では三重県の中核的漁港

を抱え、多くの住民が漁業に携わる漁業集落である。

奈屋浦を含む旧くまの灘漁協ほか、三重県鳥羽市以南の12漁協が合併して2010年に設立された三重外湾漁協は本所を奈屋浦におき、奈屋浦港の水揚量は三重県一を記録している[12]。奈屋浦港ではマグロ、カツオ、アジ、イワシ、サバ、ブリ、マダイ、イセエビ、アワビ、サザエなど沿岸、近海、遠洋から多様な魚介類を水揚げしている。しかし奈屋浦でも日本漁業の一般的課題である漁獲量減少、魚価低迷、後継者不足などの課題に直面している。

奈屋浦の祭りの変容から見える社会構造の変化は、今後の漁業集落のあり方を考える上で、重要な示唆を含むものと期待される。そこで本稿では第二に、奈屋浦における近年の祭りの変容の背景にある漁業集落としての奈屋浦の構造的変化について考察する。

3　研究の方法

本稿では、奈屋浦の祭りの変容とその背景についての事例調査を行った。奈屋浦は先述のように三重県を代表する漁業集落の一つであり、今も漁業が住民の主な生業となっている。奈屋浦を事例研究の対象とした理由は、現時点で漁業が健在である集落における社会構造の変化を捉えることで、今後の漁業集落の変化の予測や対応への示唆を得る手がかりとなると考えたからである。

奈屋浦の成り立ちや漁業の歴史などについては、郷土資料[13]や、奈屋浦の漁業と宗教について調査した文献等[14]を参照し、整理した。

奈屋浦の祭礼の変化や、住民の祭礼への関わりの変化については、地域住民へのインタビュー調査を行った。奈屋浦で長年漁業を営んできた元漁師のＳ氏、奈屋浦獅子保存会で地域の子どもたちに獅子舞を教えている元漁師のＮ氏、同じく奈屋浦で生まれ育ったＹ氏、現役漁師で奈屋浦区役員を務めるＭ氏に、過去と現在との祭りの移り変わりについて対面式で聞き取り調査を行った。すべての聞き取り調査は2019年９月に奈屋浦で行った。

表１　聞き取り調査対象者

	Ｓ氏（85歳）	Ｎ氏（76歳）	Ｙ氏（79歳）	Ｍ氏（56歳）
性別	男性	男性	女性	男性
奈屋浦居住年数	85年	76年	79年	56年
漁業との関わり	中学卒業後（15歳）から56歳まで、漁師として漁業を営んでいた。	中学卒業後（15歳）から55歳まで、漁師として漁業を営んでいた。	21歳の時、漁師であるＳ氏と結婚し、Ｓ氏を支え続けてきた。	高校卒業後（18歳）から漁師となり、現在も漁業を営んでいる。
地域での役職等	水産会社／三重外湾漁協元役員	奈屋浦獅子保存会会員		奈屋浦区役員

Ⅱ　調査結果

1　奈屋浦の地理と歴史

（1）奈屋浦の地理

三重県度会郡南伊勢町は、2005（平成17）年10月１日に南勢町と南島町が合併し、誕生した人口12,423人（2019年９月30日現在、住民基本台帳データ）の自治体である。南伊勢町は東を志摩市、西を大紀町、北を度会町、伊勢市に隣接している。北側は町域の85％を占める山林で、谷筋に沿って民家と農地が点在し、河川が熊野灘に流れ込む河口部には民家が集中する漁業集落が形成されている。沿岸部は複雑に入り組んだ海岸線のリアス式海岸が続き、それぞれの湾にある漁業集落には奈屋浦、贄浦、神前浦といったように、入江や湾を意味する「浦」という名前が多く付けられている。

奈屋浦は合併前の旧南島町の中央部、現南伊勢町の中心からやや西寄りに位置する（図１）。人口は583人、世帯数215（2020年２月４日現在の南伊勢町男女別行政区別人口統計表より）である。

（2）奈屋浦の歴史

奈屋浦は1609（慶長14）年に紀州田辺江川浦より移住した人々によって開拓された集落であるとされる。紀州漁民は各地の浦辺に進出し、納屋を建て、漁具・船具とともに生活を営むことが一般的だったことから、納屋地名が多く残っている（『南島町史』1985）。同様に奈屋浦の奈屋は「納屋」であり、漁具を入れる小屋があったことに由来すると伝えられている[(15)]。

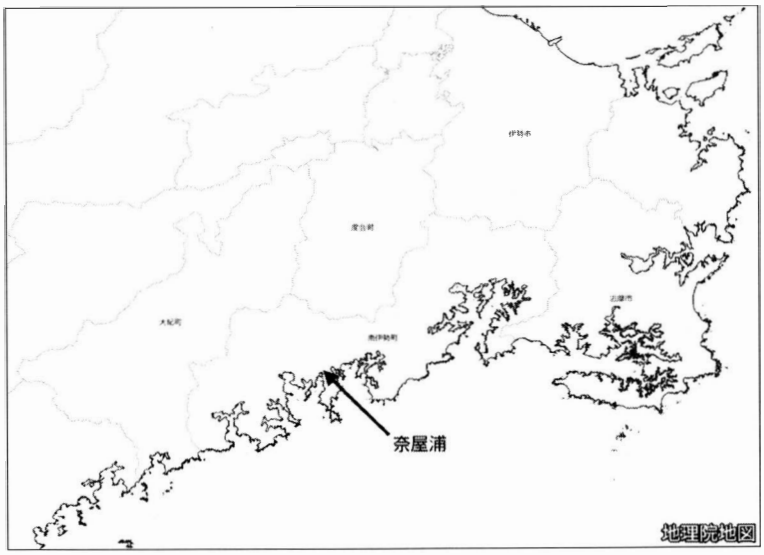


図１　奈屋浦の位置

（出典：国土地理院地図）

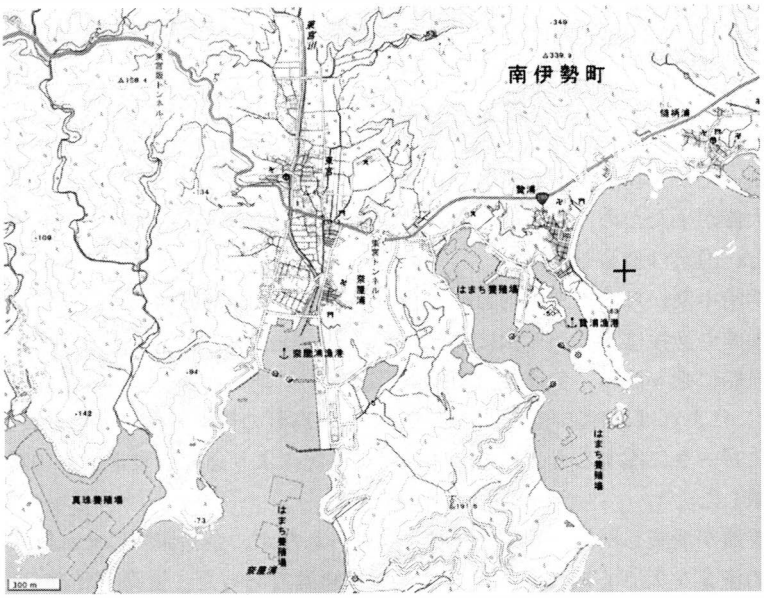


図２　奈屋浦の地形図

（出典：国土地理院地図）

奈屋浦の人々が漁によって命を継いできたことを示すエピソードがある。奈屋浦にある照泉寺境内には『支毘大命神』と記された石碑が建てられている。これは1867（慶応３）年、人々が凶作に苦しんでいた際、３月３日にシビ（マグロ）の大群が湾内に入り込み、奈屋浦の人々は７日間がかりでそのマグロを網で捕り、3,600本余のマグロが揚がったことに由来する。金額にして約6,900両の大漁であった。翌年２月、凶作による食糧不足の苦しみから救ってくれたマグロに感謝し、奈屋浦の漁民たちが「支毘大命神」と供養塔を建立したと記されている。供養碑には、魚の命をいただいて、自分たちが生き延びたという強い感謝の気持ちを表すため、大明神の「明」を「命」という字に変えて大命神と刻んだという。旧南島町の各集落には、津波被害者の供養塔や飢饉餓死疫病死者供養塔が複数残るが、魚供養碑があるのは奈屋浦だけである[16]。

（３）奈屋浦の漁業

奈屋浦の漁業の変遷は寺田（2012）および『南島町史』に詳しいが、ここではその要点を述べておきたい。かつての奈屋浦はボラの好漁場であったが、周辺の歴史の古い大きな漁村に比べると新興であった奈屋浦は、零細な漁撈を営む村であった。しかし、1699（元禄12）年にボラの大網が完成すると、地下網（じげあみ）と呼ばれる集落の共同漁労組織によるボラ漁が1955（昭和30）年頃まで続けられた。奈屋浦のボラ漁には村の11歳以上のすべての男子が参加する義務があり（若者組）、ボラの魚群が湾内に入った際、他の全漁業が停止され、地下網が優先された。ボラの漁期には、数か所に設置された荒見小屋（魚見小屋）からコミュニケーションをとり、20艘程の船団が呼吸を合わせて大網へ追い込む敷網式の集団漁が展開された。魚群を探知し、漁の指示を出す荒見、網を張る船、魚群を網に追い込む船、ボラの動きを判断し網の入れ時、揚げ

時を指示する者など、ボラ漁には一致団結した迅速な集団行動が必要不可欠であった。漁獲物の販売利益の配分も、浦法で厳しく定められていたという。地下網の開始によって、奈屋浦は共同体の統制が強い漁業集落となった。

周辺漁村との争論（漁業権をめぐる対立）や、自然災害、不漁・不作により左右される不安定な生活であったが、1867年に前述のマグロの大群が湾に入り、また1880（明治13）年にも再びマグロの大群が来たため、奈屋浦の住民は偶発的に巨額の収入を得て、マグロ用の大網が制作されるなど、漁業は継続された。

しかし、明治中期から戦前まで刺し網漁が不振となり、奈屋浦は非常に貧しい集落であったという。奈屋浦の漁民は、春から秋に鹿児島沖から三陸沖へと北上するカツオの群れを追う周辺漁村の遠洋船に乗り込み、冬は沿岸でのエビ網漁やタコ・イカの地引網漁に従事した。

『南島町史』によれば、1955年に奈屋浦を含む旧南島町の複数集落で真珠母貝養殖が始まり、1965年前後にピークに達するも、日本全体の真珠不況により急速に衰退し、1972（昭和47）年には一旦消滅した。

真珠母貝養殖が消滅した後、ハマチ養殖も試みられたが、奈屋浦ではそれほど拡大しなかった。奈屋浦の漁業を大きく成長させたのは、揚繰網漁（あぐりあみ）であった。近海でイワシ、アジ、サバ、カツオ、マグロなどの群れをランプを照らして集め、網で囲み捕獲する巻き網漁の一種である。奈屋浦は揚繰網漁によって三重県下一の水揚げ高を誇る漁港となった（図３、図４）[17]。小規模沿岸漁業に携わる漁業者も、揚繰網漁船に雇われるようになったという。奈屋浦で1970（昭和45）年に揚繰網漁を始めた人物は、1982（昭和57）年に大臣許可の大中型まき網漁業の許可を69.99トンの船舶で受けて以来、大型漁船や運搬船を複数有して事業規模を拡大し有限会社を設立し、合併を繰り返した漁協（くまの灘漁業協同組合、三重外湾漁業協同組合）の組合長を務めるなどして奈屋浦漁業の功労者とされている。

2　奈屋浦の祭りの変容

（1）恵比寿祭

毎年一月上旬になると、漁の神様が祀られている恵比寿神社の祭りが行われる。人々から「えべっさん」として親しまれている祭りで、奈屋浦では江戸時代より始まったという。一般的に恵比寿様は生業を守り、財福をもたらす神として広く信仰されており、右手に釣竿、左わきにタイをかかえた狩衣姿で、漁村では漁をもたらしてくれる神として信仰されている。

また、奈屋浦の漁師は出漁の際、饌米とお神酒を浦海の守り神である弁天様に供え、大漁を祈願し、漁を終え帰るとすぐ捕った魚を恵比寿神社にお供えして大漁満足と海上安全を報告、そして明日の漁への祈願をするという習わしがあった[18][19]。現在でも正月明けの１月２日に饌米と神酒を各船の前方と後方から海へ撒き、大漁と海上安全を祈願する「ツイジロ」が行われている。

奈屋浦の恵比寿祭は、かつて盛んに行われていたボラ網漁の豊漁を祈願する村を挙げての祭りであった。旧正月13日に青年団（11歳より25歳の男子）が、魚見を先頭に七福神、お多福、天狗、獅子と笛、太鼓に合わせ舞いながら道中行列を作っていた。社殿前では、巫女が御神楽をあげ、獅子神楽を奉納していた。獅子神楽は、前述の1867年春に起こった奇跡的なマグロ大

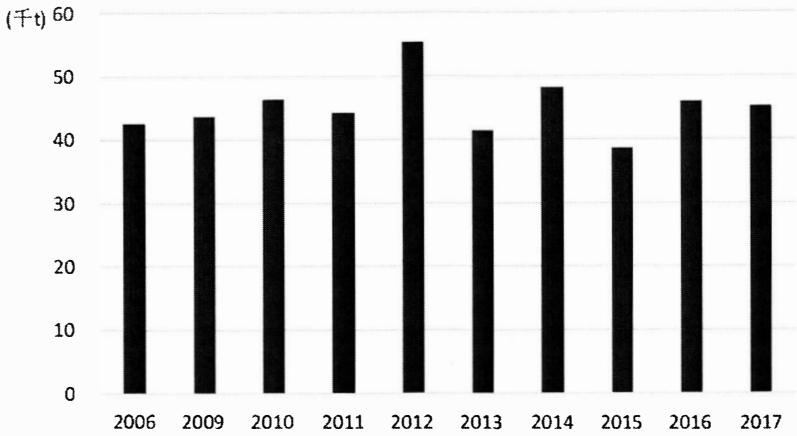


図３　奈屋浦港における水揚げ量の推移

（出典：水産庁産地水産物流通調査をもとに筆者作成）



図４　揚繰網漁船

（出典：筆者撮影）

漁の悦びを神仏に感謝し、その年から従前の神事に加えて獅子神楽を奉納したとされている。奈屋浦の獅子神楽は南伊勢町指定無形文化財に登録されており、門付け、潮がかり、花の舞、悪魔祓い、やんぐる舞、剣の舞、納めの舞の７部構成となっている。

かつては恵比寿神社の境内での獅子舞や巫女による舞の奉納だけでなく、村の中をみんなで練り歩く盛大な行列があり、村を挙げて豊漁を願う祭りとして行われていた。Y氏はかつての恵比寿祭について次のように語る。

赤い帯しめて、化粧して、ほら貝ふいてな。当屋番の家へな、練りこんでってな、踊りな

がら、「ヒョ～ヒョロピッ、ヒョ～ヒョロピッ、かけだすおいらの歌声たかく、よいしょよいしょと掛け声かけて、大漁、大漁、今年も大漁、恵比寿祭りだ、それ大漁だ」って言いながら。ほいでな、そこで獅子舞をして。昔の恵比寿祭りはボラの祭りやったでな。プーッてホラ貝を吹いてな。昔も七福神やたらおってな。みんな青年団の人らがやりよったなあ。他の人らはみんな見ながら一緒に歩いていくんさ。（Y氏）

S氏も同様に、恵比寿祭がボラの豊漁を祈った祭りであることを回想している。

恵比寿祭りはな、奈屋とか昔はどこでもそうやけど、漁村はみんなボラ網いうて、村中かかってボラ網しよってん、ボラ捕りな。ボラを見つける荒見小屋って沖にあるやろ。あれの番する人は３人おってな、青年団はそのまねをして、鉢巻きして、ホラ貝を吹きもんで、「ボラが来たボラが来た」って言いながら、ずっと行列しよってん。ボラの祭りやったわ。（S氏）

恵比寿神社の祭事には「十日えびす」という行事もあった。毎月十日になると、漁師と仲買人が神社の拝殿に夜ごもりをし、大漁と海の安全を祈願すると共に、漁についてお互い意見を交換しながら親睦を深めるものとされるが、現在この行事は行われていない。

1980年代以降の恵比寿祭では、かつてのボラ漁の荒見の姿を見ることができなくなってしまったが、毎年１月上旬[20]に禰宜（ねぎ）により神事が行われ区の役員、その他一般の人々が参列する。保育園児が祭り半纏に頭には鉢巻きをまき、七福神に変装し、多目的集会所から恵比須神社、新市場（奈屋浦地方卸売市場）までの道中練りを行っている。社殿前では、七福神に仮装した保育園児が南島数え歌を踊り、小学校高学年の女子が舞姫（巫女）となり御神楽をあげ、小中高の男子が獅子神楽を奉納している。新市場に移動後も同じく七福神、巫女、獅子舞の踊りが披露される。さらに、新市場では法被を着た幼児（保育園児）による大漁音頭が披露され、奈屋浦区により魚の刺身が無料で提供される（表２）。

表２　現在の恵比寿祭の進行表

時　間	内　容
9：00～	ねりこみ多目的集会所出発
10：00～	ねりこみ神社到着 神事開始 舞姫、七福神、獅子舞奉納 全員参拝後新市場へ移動
11：30～	新市場到着 七福神、舞姫、保育園児、獅子舞踊り
11：50	終了

（出典：筆者作成）

現在の恵比寿祭では獅子や巫女、七福神による奉納はとり行われているものの、かつてのように村を挙げて豊漁を願う盛大なものではなくなっている。練り歩く範囲が縮小され、祭りの

担い手の人数、見物者の人数とも減少しており、年々規模が縮小している。Ⅲで後述するように、奈屋浦では1970～80年代に人口構成の変化により祭りが変容していったと考えられる。奈屋浦の恵比寿祭りの変容は、祭りの担い手組織のどのような意思決定によって具体化されていったのかは、これまでに十分な調査ができていないため、今後の研究課題としたい。

（2）天王祭

『南島町史』によると、毎年７月中旬に行われる天王祭は牛頭天王を祭る行事である。漁業は常に命の危険と隣合わせであるため、厄払いの神とされる天王を祀る天王祭は盛大にとり行われる。伊勢志摩地域の沿岸部は昔から津波などの自然災害にさらされ、さらに奈屋浦は隣接する他の村に比べると貧しい村であった。食料不足による飢えや疫病などの厄災は生活の中に多く満ちていた。

天王祭の前日になると、各地区や団体に清掃や祭りの準備作業が振り分けられ、各世帯から一人ずつ参加し、祭りの準備が進められる。奈屋浦ではこのように人が集まり作業することを「出会い」と呼んでおり、天王祭やお盆などの祭事に限らず、公園やグラウンドの除草作業などでも出会いが行われている（表３）。出会い作業が始められた時期は明らかでないが、S氏によると80年以上前から行われているという。

表３　天王祭の出会い作業分担表

場　所	作業内容	担　当
信漁連～新市場	道路と市場の清掃及び飾り付け	港町、本町、新町、宮町
カサラギの浜	清掃作業	旭町
中の浜	清掃作業	日の出町
倉庫前	御船準備	保存会、役員、評議員
新市場	舞台づくり	消防団、青年団
新市場周辺	夜店準備	青年団、婦人会役員

（出典：筆者作成）

> 天王祭になるとな、川へむいて御船を浮かして、それへむいて青年団はみんな乗って、若い子は歌を歌って、川を上がったり下ったりしよったんさ。ほいでから、それが終わるとな、青年団は芝居をしよってん、演芸会。年寄りがおってな、いろんな話を聞かしてもらいよったわ。扇子をたたいてな。そんなん聞かしてもらいよってん。　（S氏）

> 「あ～りゃりゃりゃ、こ～りゃりゃりゃ」って言いながら御船を引くんや。川の上を行き来してな。ほんで終わると若い衆らさ、御船に乗っとった人らダーッとみんな走って八柱神社に参ってきよってん。ほんにして、そのあとに芝居して踊りしよってん。青年団の人らが舞台を組んでな。　（Y氏）

S氏とY氏への聞き取り調査では、1950～60年頃の天王祭では青年団が歌いながら御船に乗り込み、奈屋川を上がったり下ったりするなど、観客である他の奈屋浦住民たちを惹きつける

大掛かりなものをしていたようである。

1980年代以降の天王祭では、保育園児が御船に乗り、小学生と消防団が恵比寿神社から会場である新市場まで曳いていく。市場には大漁旗が多く掲げられ、かつての青年団が行っていた演芸会のように、地域の保育園児が頭にねじり鉢巻きをし、法被を着て踊り、ビンゴゲーム、有志の方々による歌や踊り、小中学生によるソーラン節が披露される。さらに、夜９時頃になると祭りの締めとして、大きな花火が夜空に打ち上げられている。

過去の天王祭では御船の後、八柱神社を参拝していたが、現在ではそういった神事は組み込まれていない。表４、表５に示すように、1950～60年頃と現在とを比較すると祭りの内容が増え、活性化しているようにも見えるが、祭事というよりもイベント的な要素が強まっている。N氏によると、祭りが衰退傾向にあったために青年団だけではなく、子ども会、婦人会、消防団など祭りの担い手を増やすことで祭りを維持しているという。

また、かつては祭りに参加する者が青年団等の地域組織に限られていたが、ビンゴゲーム、有志や子どもたちの踊り、花火などイベント化することで、誰でも自由に祭りへ参加することができるように変化してきている。

表４　1950～60年頃の天王祭の進行

内　容
御船に青年団が乗り込み、奈屋川を下る
青年団が八柱神社まで裸足で走り、参拝する
青年団が舞台で歌や踊りを披露

表５　現在の天王祭の進行

時　間	内　容
17：00～	夜店開店
18：00～	御船出発
18：30～	保育園児の踊り
19：00～	ビンゴゲーム
19：30～	有志の踊り、歌
20：30～	小中学生のソーラン節
21：00～	花火
21：30	終了

（３）浅間祭

浅間信仰は富士山の山神である浅間大神を祀るもので、浅間（せんげん）祭は富士山麓の浅間神社を中心とした祭りである。浅間祭は毎年６月、南伊勢町内各地の浅間講により行われていた。度会郡には東日本から伝えられたと考えられる浅間信仰が定着していた[21]。奈屋浦では浅間祭はすでに廃れてしまったが、現在も奈屋浦と隣接する東宮、贄浦などでは浅間祭は続いている。伊勢度会地方では、江戸時代の後半には富士講や浅間講が結成され、白衣に白帯・金剛杖で「六根清浄お山は晴天」と唱えながら富士山に登り一家の幸福を祈った。その伝統や習俗は今も受け

継がれている。

浅間祭はな、浅間講に入ってな、有志の人だけでつくっとってん。６月26日の晩から28日まで。三日も籠りよってん、それから精進料理、生臭いもん、魚も肉も一切食わんと、野菜ばっかで。ほいで浅間さん上がってって、それから終わると富士山の浅間さんへ参ってきよってん。（S氏）

入りたい人だけな、漁師やどうやって関係なくな、浅間講の男の人らは一晩中ずっと、その家で籠っとってな。女の人らは入られへんだでな。たまに「せ～んげ、せ～んげどっこいしょ」って晩でも村を回ってきよってん。白い服着て、大きな数珠を首からぶら下げてな。プーっと笛吹いてさ。夜でもそやって回ってきよってん。浅間祭の時はな、ばあちゃんらは外に出されてな、親戚の家おってな、女の人らはおられへんもんでな。男の人らだけで、ごはん用意してな、食べよってんな、精進料理な。みんなはな、収穫したキュウリや豆、野菜をな、その家へお供えで持ってきよってん。ほんで何年に一回かは富士山に参ってきよってん。（Y氏）

S氏とY氏への聞き取り調査から、かつての浅間祭は漁業とは関係なく、浅間講の行事として行われていたことがわかる。近年では、精進料理や家籠りは行われなくなり、若い人たちが顔に化粧をし、白装束に大きな数珠を下げ、昔と変わらない格好をして竹を担ぎ、浅間山を登っていた。この浅間祭も近年までは行われていたが、現在は祭り自体が行われなくなってしまった。

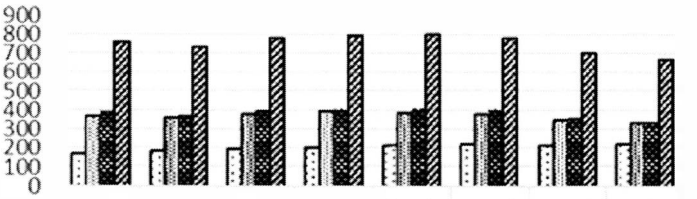
Ⅲ　祭りが変容した要因の考察

１　担い手の変化

1950年代以降の農山漁村地域は、高度経済成長に伴い、若者が都市部へ流出し過疎化が進行してきた。他地域の祭りの衰退においても、人口減少は主要な原因の一つとされる（熊澤他、2011）。

しかし、奈屋浦では揚繰網漁による漁業で若年者も生計を立てることができたためか、1998（平成10）年までは人口減少傾向は認められず、2003（平成15）年以降に人口減少が進行している（図５）。一方で、Ⅱで述べたように1980年代には現在の祭りのあり方に変容を遂げている。つまり、奈屋浦では祭りの変容は2003年以降に見られる統計上の人口減少に先立って生じているのである。

前述のように、恵比寿祭と天王祭は、かつて青年団が担っていた役割を、現在は保育園児や小学生が担っている部分がある。つまり青年団の弱体化（消失）が祭りに影響を及ぼしたとも考えられる。当時の奈屋浦では、盛んに行われていた真珠の稚母貝養殖が1970年代後半より不況に陥り、従来は多くの若者が中学校を卒業すると漁師になっていたが、漁業不振により奈屋浦から離れた伊勢地方の高校に進学する人が増えた。住民票は奈屋浦に残し、祭りの担い手であった青年団に所属しても、奈屋浦を出て下宿するために実際の活動に参加することが難しく



	S.54	S.59	H.1	H.5	H.10	H.15	H.20	H.25
世帯数	170	183	192	199	211	220	215	222
男	368	360	380	388	386	378	342	331
女	389	371	395	404	411	402	359	336
合計	757	731	775	792	797	780	701	667

図5　奈屋浦の人口推移

（出典：住民基本台帳データを元に筆者作成）

なってしまった。そのため、統計上は人口減少は見られないが1970年代後半以降、若者の流出は進んでいたのである。N氏への聞き取り調査からも、高校進学者が増えたことで青年団が弱体化してきた様子がうかがえる。

> 中学校おわると青年団になりよったでな。高校行く人らは少なかったでさ、よっぽどやないと高校には行かんだでさ。就職か、漁師かさ、長男はまあ漁師やでさ。ほうすると中学校３年になると、就職活動やいう人と、進学で勉強する人らとおったわ。青年団もまあ学生が多なってったもんでさ、ほいでだんだんと青年団っていうのは無いようになってったもんでさ。（N氏）

> 高校っていうのができたでさ、それが青年団がなくなった一番の原因やろな。みんな都会へむいて、漁師じゃあかんってことでな、都会へ進学してな、行きよったもんで青年団は少ななってん。高校生でも青年団にはなっとるんやけどさ。（N氏）

奈屋浦における祭りの変容の原因は、一つには担い手であった若年男性の域外流出にあったと言える。祭礼的、あるいはイベント的に変化した祭りの表舞台での担い手は幼児・小学生へと低年齢化し、地区住民全体で準備作業を分担することで祭りが維持されている。

また、漁業集落である奈屋浦における重要な労働力である若年男性の減少は、次節に述べる漁業の変化とも密接に関わっていると考えられよう。

2　漁業の変化

次に、祭りの変容を導いた要因として、漁業の変化について検討する。恵比寿祭と天王祭はどちらも漁業の安全や豊漁を祈願するものである。かつては沿岸・近海漁業も人手による命が

けの漁業で、天候や自然条件に大きく左右されていた。しかし、明治期以降、日本の漁業は技術発展を遂げてきた[22]。漁船の動力化、漁網の強靭化、集魚灯や無線の利用、急速冷凍装置の開発、漁撈機械（揚網など）の機械化・省力化、魚群探知機や全球測位衛星システムの開発などの技術が導入され、以前と比べて少ない労働力で容易に「安全」と「豊漁」がもたらされるようになってきた。しかし他方では日本周辺海域の水産資源量は長期的に減少傾向にあり、全体としては漁業の持続可能性が問われる状況にある。前項で述べた高校進学者の増加は、こうした漁業の変化を背景としたものと考えられる。

漁業の変化と関連するもう一つの要因として、漁業者の信仰心に注目してみよう。漁業者たちは、漁業技術が発展した今では神への祈願は必要ないと感じているのだろうか。もし漁業者が信仰心を失っているとすれば、祭りの変容と関係しているのだろうか。豊漁と海上安全を祈願する祭りである恵比寿祭と天王祭で、奈屋浦の人々がその由来をどの程度意識しているかは不明だが、恵比寿祭でボラ漁の荒見姿が消えるなど、漁業の変化に応じて祭りの内容は変化しながらも、祭り自体は維持されている。

また、漁業者による信仰として「こんぴらさん」信仰がある。金比羅は日本では大物主神が垂迹したものとされ、五穀豊穣、産業、文化などの繁栄と、国や人々の平安をもたらす神様と信じられており、海上から現れることから、海上交通の守護神としても信仰されている。奈屋浦の「こんぴらさん」が祀られている照泉寺にて、漁業者が毎月10日に大漁祈願、海上安全を願い、祈祷を行っている。

> こんぴらさんは漁の神様やろ。昔から毎月10日になると魚の供養をしにな、昔は一番上まで上がってきよったけど、今は本堂さんでやっとるけどな。もっと昔は大江までも行きよったわ。今は清洋（清洋水産：筆者注）と長久（長久水産：筆者注）だけやな。昔は大敷の人らも行きよったんやけどな。今は二つだけやなあ。あとは毎月１日に朝熊（朝熊ヶ岳：筆者注）にも参るやろ、魚の供養のために。漁がなかってな、初めのうちは。そいで、朝熊に行ったらええよ言われて行きはじめたん。　（Y氏）

伊勢地方では全ての魂は、朝熊山（あさまやま）に帰ると言われている。清洋水産株式会社では、毎月１日になると朝熊岳金剛證寺へ足を運び、魚への感謝を込めて供養を行っているという[23]。さらに清洋水産株式会社と長久水産有限会社は、社員が年に一度香川県の金刀比羅宮へ行き、海上安全、大漁祈願を欠かさず行っている。

また、奈屋浦では漁師や漁業に関する禁忌の言い伝えが今でも守られている。奈屋浦では船の神様は女性であると信じられ、船の神棚には女性にとって大切とされている髪の毛が入れられている。女性が船に乗ると嫉妬して不漁になると信じられているため、「女性は船に乗ってはいけない」という言い伝えが今も守られている。他にも「漁師の家は四本足の生き物を飼ってはいけない」などの言い伝えが守られている。このように、奈屋浦の漁業者たちは、漁業技術が発展した今も、信仰心が薄れたとは言い難い。

確かに祭りは変わってきたが、奈屋浦がかつてのように自然災害や凶作に晒されながら命がけで漁業を営む貧しい漁村ではなく、様々な漁業技術を駆使して県下一の水揚量を誇るようになった今でも、漁業者たちの信仰心が薄れたために祭りの変容がもたらされたとは考えにくい。

佐藤（1991）は「漁業が運に左右される職業であることは、一面で信仰心をもたせ、縁起をかつぐことにかりたてている側面があると同時に、他面、個人的技術如何によって左右される側面を伏せもっていることを意味している。両面は表裏一体の関係にあり、漁師の世界観の研究にはこの両面の解決が必要なのである。」[24]と述べている。自然を相手とする漁業者たちの個人的技術と信仰心の「表裏一体」関係を解明することは、漁業に関する信仰の変化を捉えるためには重要な課題であるが、この点は今後の研究課題としたい。

3　生活様式の変化

奈屋浦の祭りは、漁業に関する神事として取り組まれてきた一方で、多くの祭りがそうであるように、人々の生活に根差した文化でもあった。聞き取り調査では、全員がとても楽しそうにかつての祭りのことを話してくれた。

> 祭りは楽しかったなあ、すごい楽しみにしよったわ、天王さんになると柏餅食べれるもんで。砂糖もなかったしな。食べ物もなかったし。（S氏）

> 祭りは楽しかったな。祭りになるとええ服を買ってもうてな。みんなええ服に着替えるんやに。盆の服、浅間さんの服、天王さんの服ってみんなありよってん。そのために買いよってんでな。そんな時にしか買われへんだしな。特別やったでな。今しはみんな破れたもんなんて着やんしな、一緒やでな。楽しかったよ、楽しみやったよ。（Y氏）

> 当屋番いうて世話する人らがおったんさ、そこで話し合って、ほいでこの地区はここ行こか言うて旅行もよう行きよった。おじさんらの港町は浦島いったりしよった。恵比寿祭やもんで行ったんさ。違う日にちにな。（N氏）

祭りは大漁や海上安全を願うものであると同時に、着飾ってご馳走を食べられることを待ち遠しく感じるほどの特別な楽しみの一つであったことがうかがえる。そのように祭りが非日常であると感じられるのは、日常には質素で貧しい生活を送っていたからであろう。戦後奈屋浦の食卓には、芋や麦粥などの質素なものが毎日並んでいた一方で、祭りの際には伊勢エビやアワビなどのご馳走をみんなで持ち寄り、宴会が行われていたという。祭りの内容について言えば、獅子舞などの奉納神事に加えて、青年団による芝居や仮装行列などの娯楽的要素が取り入れられていたことから、若者たちの道化を楽しむ一大イベントでもあっただろう。恵比寿祭で子どもたちが七福神に扮して練り歩く様子から、祭りを楽しみにした人々の気分が感じられる（図６）。

現在では、祭りの日に特別なご馳走を食べたり、着飾ったりすることはなく、地区ごとの宴会や旅行も行われなくなっている。大量生産・大量消費の生活様式が津々浦々に浸透し、祭りでなくとも日常的にバラエティ豊かな食事をとり、手軽に既製服を購入できるようになった。簡単に旅行することができ、テレビやインターネットなどの娯楽も豊富である。祭りという「ハレの日」はかつてほどの魅力を持たなくなっているのだろう。祭りへの関心が低下する一方で、



図６　1998年恵比寿祭りの様子

（出典：筆者作成）

集落の人々が祭りのために使える時間が減少していることも考えられる。

> まあ今はほんとに金儲けるというか、そんなことに一生懸命でな。今の人間はおおかたサラリーマンが多なってきよったやろ。昔はサラリーマンなんてなかったでな、みんな自営業やったでな。体縛られとらへんで、自由やったんや。　（S氏）

奈屋浦が漁業集落であるとは言っても、経営体は企業化されており、雇用されて漁業に携わる人が多くなっている。そのために、S氏が言うように、労働時間が固定化され、祭りの準備や種々の芸の練習に時間を割くことも容易でなくなっていると考えられる。

Ⅳ　おわりに

ここまでに、奈屋浦の祭りの変容実態とその背景要因を明らかにすることを目指した。本稿で明らかになったことを簡潔に述べて、結論としたい。

祭りの変容実態については、変化の時系列を資料や聞き取りによって正確に裏付けることはできなかったが、進行内容の変化や祭りの担い手の変化はおおよそ把握することができた。その背景については、仮説の域を出るものではないものの、３つの要因が考えられた。１つには、若者に遠方の高校進学者が増えて彼らが集落を出て生活するようになったため、祭りの担い手である青年団が人手不足に陥り、より幼い小学生や保育園児にも祭りを担わせざるを得なくなったことである。そのために祭りの内容や規模が変化した。奈屋浦では漁業が好調であったことで経済的に豊かになったが、子どもを高校・大学へ進学させる家庭が増え、青年団に属す年代の若者が集落にほとんどいない状態が続いている。彼らが漁業を継承するのかどうかは、奈屋浦が直面している大きな課題である。２つには、漁業のあり方の変化とともに、豊漁や海上安全を祈願した祭りも変化したことである。ただし、漁業者は祭りに関与するだけでなく、漁業に関する慣習的な信仰生活を続けており、祭りの衰退傾向と漁業者の信仰心の希薄化が直結しているとここで結論づけることは難しい。３つには、衣食、娯楽などの面で人々の生活が豊かになり、「ハレの日」であった祭りへの関心が低下していることである。労働時間の固定化など働き方の変化も、祭りに付随する準備や練習などの共同行為を難しくしていると考えられる。

これらの仮説がもし一定の妥当性をもつとすれば、奈屋浦の祭りの変容は、生業と生活の両

面において近代化が進行したために共同体の統合が弱まった証左と見ることができる。しかし、奈屋浦の祭りは変容しながらも続いているものが多く、子どもたちを祭りの中心に据えることによって、祭りを共同体再統合の契機にしようとする意志も伺える。今後も少しずつ続くであろう祭りの変容を観察することは、奈屋浦の漁業が今後どのように変化し、漁業集落の社会構造をどのように変化させるかを捉える一助となるだろう。

注

（1）柳田國男『日本の祭り』弘文堂、1942年、38ページ
（2）同上
（3）熊澤栄二、堀内美緒、四方葵、佐々木理沙「奥能登珠洲における地域づくりに向けた祭礼の衰退原因の分析」『ランドスケープ研究』74（5）、2011年、667-672ページ
（4）深澤あかね「商業町における祭りの変遷 ── 祭りの背後にある商業経営と生活に着目して ──」『社会学年報』40、2011年、87-97ページ
（5）阿南透「高度経済成長期における都市祭礼の衰退と復活」『国立歴史民俗博物館研究報告』第207集、2018年、223-252ページ
（6）同上
（7）坂本優紀、石坂愛、武智玖海人、周安琪、岩井優祈・篠原弘樹・白 奕佳・松井圭介「地方都市における祭礼の変容 ── 土浦八坂神社祇園祭における氏子の対応に着目して ──」『地域研究年報』40号、2018年、51-74ページ
（8）深澤あかね、前掲書
（9）田仲聡「東日本大震災によって被災した祭礼の復興について ── 人口減少に着目した石巻市雄勝町における２つの事例の比較研究 ──」『専修人間科学論集 社会学篇』Vol.4 No.2, 2014年、167-174ページ
（10）坂本優紀ほか、前掲書、52ページ
（11）上野千鶴子「祭りと共同体」、井上俊編『地域文化の社会学』世界思想社、1984年、50ページ
（12）奈屋浦には水産会社が複数あり、また奈屋浦港には周辺一帯の漁業者が水揚げするため、奈屋浦港の水揚量と「奈屋浦住民による漁獲量」という意味での奈屋浦の漁業規模とは一致しない。
（13）南島町『南島町史』1985年
（14）寺田喜朗「浦村における魚供養の生成と定着 ── 南伊勢町奈屋浦の変遷と漁撈習俗 ──」『大正大学大学院研究論集』第35号、229-244ページ
（15）寺田喜朗、前掲書
（16）南島町、前掲書
（17）近年水揚量で奈屋浦に匹敵する漁港は、北海道の根室港や紋別港である。
（18）寺田喜朗、前掲書
（19）加藤多喜男『ふるさと奈屋浦』奈屋浦漁業協同組合、2000年
（20）本来は１月15日と決められていたが、現在では漁を休まなくても良いように土曜日などにおこなわれている。
（21）高谷重夫「伊勢度会の浅間信仰」『近畿民俗』10号、1953年、175-178ページ
また、ブログサイト「伊勢志摩国浅間信仰図」は現在の伊勢志摩地方の浅間信仰の状況を紹介し、浅間信仰は災害信仰であると分析している。
（https://tokidokizm.amebaownd.com、最終閲覧2020年９月15日）
（22）水産庁『水産白書』2017年
（23）清洋水産が朝熊山での魚供養を行うようになった経緯と、照泉寺での魚供養については、寺田喜朗、前掲書を参照。
（24）佐藤康行「寺泊における海の信仰と漁業技術について」『寺泊町史研究』７号、1991年、50-74ページ